

第7番目のしるし：ラザロの復活

ヨハネ福音書11:38-46

【新改訳 2017】

11:38 イエスは再び心のうちに憤りを覚えながら、墓に来られた。墓は洞穴で、石が置かれてふさがれていた。

11:39 イエスは言われた。「その石を取りのけなさい。」死んだラザロの姉妹マルタは言った。「主よ、もう臭くなっています。四日になりますから。」

11:40 イエスは彼女に言われた。「信じるなら神の栄光を見る、とあなたに言ったではありませんか。」

11:41 そこで、彼らは石を取りのけた。イエスは目を上げて言われた。「父よ、わたしの願いを聞いてくださったことを感謝します。」

11:42 あなたはいつでもわたしの願いを聞いてくださると、わたしは知っておりましたが、周りのいる人たちのために、こう申し上げました。あなたがわたしを遣わされたことを、彼らが信じるようになるために。」

11:43 そう言ってから、イエスは大声で叫ばれた。「ラザロよ、出て来なさい。」

11:44 すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたまま出て来た。彼の顔は布で包まれていた。イエスは彼らに言われた。「ほどいてやって、帰らせなさい。」

11:45 マリアのところに来ていて、イエスがなさったことを見たユダヤ人の多くが、イエスを信じた。

11:46 しかし、何人かはパリサイ人たちのところに行って、イエスがなさったことを伝えた。

【祈りながら考えよう】

- (1) マルタは、主がラザロを今よみがえらせることを信じていましたか。そうだとどうして分かりますか。
- (2) 主イエスがラザロをよみがえらせる前に声を出して父なる神に祈られたのはなぜですか。
- (3) 主が「死人のラザロ」に向かって「ラザロよ。出て来なさい」と大声で叫ばれたのはなぜですか。

【解 説】

(1) その石を取りのけなさい

主は、心のうちに憤りを覚えながら、墓に来られた。主が心の中で憤りを覚えておられたのは、人々をこの悲惨な死に追いやる悪魔に対してである。

「墓は洞穴で、石が置かれてふさがれていた」(38節) ユダヤ人の墓には何種類かのものがあつたようである。最も一般的なものは、岩山の中腹に水平に穴を掘り、入口に石を置いた型であつた。イエスが葬られた新しい墓は、このタイプであつた。また、傾斜のある、次第に下降する穴の型があつた。ラザロが埋葬されていた墓は、このタイプと思われる。

「イエスは言われた。『その石を取りのけなさい』」(39節) 周囲の群衆に向かって石を取りのけよと命じることで、イエスは二つの効果をねらっておられる。

第一に、そこに居合わせたすべての者の心に、これからなそうとする奇蹟の現実性と真理性を印象づけられた。巨大な石を持ち上げ、取りのけるのに手を貸した者すべては、それを覚え、証人となるであろう。

その者は、「私自身、石を持ち上げる手伝いをした。詐欺的行為がなかったことは確かである。墓の中には死体があつた」と言い得るであろう。実際のところ、洞穴の奥から流れ出る悪臭によって、石を取りのける手助けをした者すべては、そこに何があるかを察したであろう。

第二に、主イエスは、人間にできることは人間にやらせるという単純明快な教訓を示しておられる。人は、魂を復活させ、いのちを与える能力を持たないが、石を取りのけることはできる。

(2) もう臭くなっています

死んだラザロの姉妹マルタは言った。「主よ、もう臭くなっています。四日になりますから。」

- ①これはラザロの死の事実性を明らかに示す最後の表現である。彼は氣絶したのでもなく、昏睡状態にあつたのでもなかった。彼が死に、息を引き取ったのを確かに目撃した彼の姉妹が、大勢の群衆を前にして、ラザロが死んで4日が経つこと、きっと腐敗が始まっているであろうことを明言する。パレスチナの気候を考えれば、当然の推測である。
- ②これは、ベタニアの一家と主イエスとの間に詐欺、共謀、申し合わせといったものが全くなかつたことを、疑いの余地なく立証する。ここでイエスの命令の妥当性を実際に疑い、実質上、その石を動かす意味がないと語り、今さら何をしてその兄弟を死の力から解放することなどできないと公言するのは、ラザロの姉妹である。
- ③これは、信仰者の心の奥底に大きな不信が残ることを教えている。このところでマルタは、イエスがメシアで

あると信じながら、最も大切な時に尻込みし、おじけづいている。石を取りのけることに意味があるとは全く思えない。その兄弟が死んで幾日経つかをイエスが覚えているかどうか疑わしく思っていることを、彼女は衝動的に、気をもんでほのめかした。

イエスにそう言ったのが「死んだラザロの姉妹マルタ」であつたと殊更に述べられるのは、無意味ではない。彼女でさえそう語り、反対したのだから、詐欺、共謀の可能性はさらに少なくなる。

(3) 信じるなら神の栄光を見る、とあなたに言ったではありませんか

23節で主は、ラザロはよみがえる、とマルタに告げておられた。しかし、マルタは「主よ、もう臭くなっています」と叫んだ。そこで主は厳かな叱責を發せられた。「信じるなら神の栄光を見る、とあなたに言ったではありませんか」この主のことばの順序に注意したい。「信じるなら……見る」。あたかも主イエスが次のように言っておられたかのようである。「もしあなたが信じさえするなら、神にしか出来ない奇蹟をわたしが行うのを見、『神の栄光』がわたしを通して表れるのを見『見る』ことだろう。しかし、まずは『信じ』なければならない。そうすれば『見るようになる』。大きな祝福を見たいのなら、まず信じなければならない。しかし、人間の生来の考えは全く逆で、まず見て、それから信じようとする。敬虔な信仰者であっても、キリストのことばを思い出す必要がある。それを忘れてしまいやすいからである。」

(4) わたしの願いを聞いてくださったことを感謝します

石が墓から取りのけられた。主イエスはその入口に立ち、群衆は周りに立って、次に何が起こるか注視している。墓からは何の物音も聞こえない。生命を感じさせるものは全くない。だが、みな凝視し、耳をそばだてている最中、イエスは目を上げ、群衆の聞いている前で天の父なる神に向かって厳肅に、声を出して祈られた。

「父よ、わたしの願いを聞いてくださったことを感謝します」(41節) この表現は注目に値する。恐らく嘆願の祈りをされるだろうと人が考えるような場面で、イエスは「感謝」から始めておられる。主イエスは、「願いを聞いてくださった父」に感謝をささげた。この章には、それ以前の主イエスの祈りは記録されていないが、間違いなく、主はこの間、絶え間なく御父に語り続けられていたに違いない。そしてラザロの復活を通して神の御名があがめられるように祈っておられたに違いない。ここで主は、その出来事が起こることを見越して、御父に感謝をささげておられる。

イエスは声を出して祈られた。それは「御父がご自身をお遣わしになったこと」を「この人々が信じるため」(42節)、またご自身が何をなし、語るべきかを命じておられるのは御父であること、そしてご自分は常に、父なる神に完全に依存して行動しておられることを、人々が信じるためであつた。ここで再び、父なる神と主イエス・キリストが本質的に一体であることが強調されている。

(5) ラザロよ、出て来なさい

そう言ってから、イエスは大声で叫ばれた。「ラザロよ、出て来なさい。」すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたまま出て来た。彼の顔は布で包まれていた。イエスは彼らに言われた。「ほどいてやって、帰らせなさい。」(43-44節)

ここでの奇蹟の最後の山場が、この節に描かれる。関心は墓と主イエスに集中された。群衆は息を殺して見ている。

その時、人々が見ているところで、注意を一身に集めた後、イエスはラザロに墓から出て来るようにと命じられた。

「イエスは大声で叫ばれた」のは、明らかに、居合わせた者すべてが聞き、注目するようにとの意図があつてであつた。

ラザロが死んでいたことを示すさらなる証拠として、「彼の顔は布で包まれていた」という事実が付記されている。このような布に顔を包まれて4日も生きられる人はいない。主は再び人々の協力を募り、ラザロの布をほどいてやって、帰らせるように命じられた。

死者をよみがえらせることができるのはキリストをおいて他にはいない。しかし、つまずきの石を取り除き、偏見と迷信の「死の装束」を解く仕事は、私たちに託されている。

(6) ユダヤ人の多くがイエスを信じた

マリアのところに来ていて、イエスがなさったことを見たユダヤ人の多くが、イエスを信じた。しかし、何人かはパリサイ人たちのところに行って、イエスがなさったことを伝えた。(45-46節)

マルタ、マリアを慰めるためにエルサレムから来訪していたユダヤ人の多くが、今しがた目撃した奇蹟に反論できなかった。その日以来、イエスがキリストであることを、もはや否定しなかつた。この奇蹟は主イエス・キリストの神性を間違いなく宣言するものとなり、彼らはイエスを信じた。死んで四日も経っていた死体を、神以外のだれが呼び出すことが出来るだろうか。

しかし、奇蹟が人生に及ぼす影響は心の状態によって左右される。もし心が邪悪で、反抗的で、不信仰であれば、死人がよみがえるのを目撃しても信じることはない。まさにこの場合がそうであつた。この奇蹟を見た幾人かのユダヤ人は、否定しようのないような証拠があるのに、主イエスをメシアとして受け入れようとはしなかつた。そしてパリサイ人たちのところへ行って、ベタニアで起こつた出来事を報告したのである。

